

九州大学学術情報リポジトリ  
Kyushu University Institutional Repository

中村哲著述アーカイブ  
Nakamura Tetsu Digital Archive

---

## 空爆と「復興」：アフガン最前線報告

中村, 哲、ペシャワール会 編著

空爆と「復興」 現地ワーカー報告  
(3/3、2003年)

<http://hdl.handle.net/2324/4772331>

---

出版情報：空爆と「復興」：アフガン最前線報告, pp.200-228, 2004-05. 石風社  
バージョン：初版 2004-05-31  
権利関係：©Tetsu Nakamura & Peshawar-kai Printed in Japan 2004  
石風社より許諾を得て本文を公開しています。  
公開しているPDFの印刷、複製および許可のない二次利用はおやめください。



## 一通の嘆願書

水源確保事業担当 目黒 丞

### 井戸の給水方法をめぐって

日本でご支援くださっている皆様、いかがお過ごしでしょうか。

先日、グラエヌールの五本目の灌漑井戸の周囲の住民から一通の嘆願書が届けられました。その内容はペシャワール会の掘った井戸からの水の配給方法をペシャワール会自身ではつきり決めてほしい、というものでした。

この五本目の井戸だけは二つ以上の地域にまたがる中間地点にあり、他の四本の井戸は問題ないのですが、この場所では水を巡って地域間の争い

が起こる可能性を持っていました。この時点ではまだポンプなども完成しておらず、完成後にきちんとした配水システムを作るつもりでしたが、その前に水争いを避けたいと申し出てきたのです。

驚いたのは嘆願書にはそれぞれの地域の責任者の名前と署名があり、一部の人間が他の者を誹謗ひぼう中傷ちゅうしやうするために書かれた物ではない事でした。

グラエヌールに限らず、アフガニスタンでは隣の村と殺し合いをすることさえあるほど、独立性が強く、血縁と地縁を重視し、排他性の強い人々がほとんどです。署名者の中には私知知っているだけでも仲の悪い村同士どうしの責任者も含まれていました。

### 水は財産

アフガニスタンでは水は財産です。

カレーズ（伝統的地下水路）を個人的に所有しているものは地主以上の収入と権力を手にすることすらできる社会です。彼らがペシャワール会の我々に判断を委ねたという事は、我々を中立かつ



苦心のすえ得られた貴重な水が大地を潤す

公平な第三者として認識したという事です。我々は完成後に住民自身によるジルガ（長老会議）を開催し、ペシャワール会の代表者が立会人として出席することを提案し、長老や住民も承諾してくれました。この事はペシャワール会と住民の間の信頼関係を示す良い例だといえると思います。

しかしながら楽観的に「絶対の信頼関係がある」と考えているわけではありません。アメリカによるアフガニスタンへの空爆の際、ペシャワール会以外の国連関係や他のNGOのほとんどが住民による略奪を受けました。数年前にクリントン前大統領がアフガニスタンとスーダンに巡航ミサイルを撃ち込んだ際にも、略奪がありました。ほとんどのNGOや外国人が逃げ出し、「どうせ戻らないのであれば……」と貧しい人々が備品を奪って生活のために売り払ってしまったのです。我々の事務所が略奪されなかったのは、何があっても活動を継続するという姿勢を示し続けたためでした。

## うすれゆく親日感情

現在、アチン郡では作業終了が近づき規模が縮小されつつある事と、パキスタンより戻ったばかりの元難民だった住民がペシャワール会の活動を知らない事もあって、日本人スタッフを派遣しないようにしています。さらにイラク攻撃が始まってしまう、また活動地域以外の住民は我々の活動を知らないため、安全を考えて日本人の派遣を控えています。アチン郡、ロダット郡など、活動の歴史の浅い地域はしばらく様子を見ようと考えています。

信頼関係と人々の生活の利害は表裏一体だと思います。援助団体が活動を終了すれば、彼らアフガニスタン人にとっては、ただの通りすがりの外国人と変わりがなくなることすらありえるのです。

## 日本の米国支持、ラジオで報道

ただ、ドラエヌールに関しては中村医師とペシャワール会が一〇年以上の間、どんなことがあっても医療活動を続けてきたという実績が信頼

関係の根本にあると感じています。今のジャラバード周辺の状況を見て、略奪や暴動などが起る気配はまったくと言っていいほどありませんが、最悪の場合として、治安が悪化して陸路でパキスタン側への避難が不可能になったとしたら全日本人をドラエヌールに避難させる事を考えています。ドラエヌールの住民ならば命がけて我々を守ってくれると信じているからです。

信頼関係を築くには想像以上の時間がかかります。二〇年近くかけて皆さんのご支援により築き上げた信頼関係が、我々現地の日本人スタッフを守ってくれています。

アフガニスタンではラジオのBBC現地語放送が普及しており日本政府や首相の発言まで私より早く知っています。日本政府がアメリカの武力行使についてすぐに支持した事すら有名です。

それでも我々が変わらず活動を続けることによって、ドラエヌールの住民や現地スタッフのように「日本の国民は戦争を望んでいない、同じ人類の平和を望んでいる」と、いつかすべてのアフ

ガニスタン人に知ってもらいたいと願っています。

(2002・12)

## 日本とアフガンの平和を危惧

ジャララバード事務所連絡員 近藤真一

### 最初は「金魚のフン」

現在ペシャワール会(PMS)ジャララバード事務所スタッフは仕事が忙しく、てんでこ舞いである。それと言うのも中村医師が、長い間胸のうちであったためにおられた灌漑用水路建造計画が二〇〇三年二月に突然、構想段階から実行段階へとシフトしていったからだ。全長一四キロメートルという長大な灌漑用水路で、約一五万人の人々の生きる糧かてになるという代物である。元来PMSは

医療NGOであると私は思っていたが、いままでは千本以上の井戸を堀り、農業を始め、次は長大な灌漑用水路を建造しようとしている。PMSの頭である中村医師は怪物だ。

私はまだアフガニスタンに来て二ヶ月程度しか経っていないのだが、まだ右も左も分からない状態の時に、今年から一四キロメートルの灌漑用水路を作り始めると聞いた。すでに周りの日本人の先輩方は忙しい毎日を過ごし、仕事仕事の毎日だった。私はといえばアフガニスタンの文化や国民性について何も知らない為、金魚のフンのように先輩の後に付いて行く事しか出来なかった。日本とは文化や社会、言葉の違う国で我々外国人が現地の人達と仕事をするという事は想像以上に難しい事であり、日本ではすぐに方が付くような仕事でも、なかなか解決出来ないような事が多々あった。先輩方はその事を良く心得ており、どうにか三月一九日、灌漑用水路のセレモニー(鍬入れ式)まで辿り着いたのだった。セレモニー当日も、灌漑用水路を作る地元の人達の協力や、いつ

も以上に一生懸命働く現地人スタッフのおかげで、事は順調に運び、セレモニーは無事終了した。

## 平和の祈り

その後、肩の力が抜けてしまった私は現地人スタッフと一緒に事務所に戻り、彼らと共にお茶を飲みながらくつろいでいた。ちょこちょこっと周りの人達と話をした後、このお茶うまいなあとのんきに感心していた。すると突然、周りの人達がお祈りをしたのである。お茶に気を取られていた私も焦ってお祈りをした。しかし、なぜ急にお祈りをしたのであるだろうかと思っただけで、片言のパシユトー語で彼らに質問した。答えはこうである。

「イラク攻撃が始まらないようにお祈りをしたのだ。」

あの時、戦争が始まらないようにお祈りをしていた彼らは戦争の始まった今、どんな気持ちでいるのだろうか。さらに、日本がこの戦争に荷担しているという事を知った時、彼らは我々日本人の

事をどう思うのだろうか。ペシャワール会は日本の支援者のもと、これからも努力を惜しまないだろう。しかし、その努力は現地の人々の理解と協力がなければ無意味なものとなると私は思う。これから灌漑用水路建設計画は本格的に始動するのだが、私は少し不安である。戦争が長引けば長引くほど、現地人と日本人との間に確執が生じるのではなからうか。取り越し苦労ならいいのだが。

(2003・4)

## わずかな恵みを求め生きる人々

ジャララバード事務所会計 川口拓真

## 変わらぬ営み

ヒンズークシュ山脈と岩塊群が覆うアフガニス

タン東部一帯。短い冬が去り、春愁に浸る暇もなく、猛烈な初夏の漂いをじりじりと感じつつあります。そのような季節の移ろいのなかでも、人々は営々と変わらぬ光景を我々に見せてくれます。自然の創りだした掟に逆らうことなく、脈々と時だけが流れているようです。

依然として、早魃<sup>かんばつ</sup>の被害が治まらないアフガニスタンでは、例年の降雪が減少傾向にあるようです。とはいえ、今冬も、其々の山稜<sup>それぞれ</sup>に降雪がありました。それ以外の千メートル級の小さな山々には、降雪を確認することはありませんでした。

とにかく現地では雨が極端に少な過ぎる、ということは確かなことです。

クナール河の源流は、隣のパキスタンのラシクトなど、辺境地から遙々流れてきて、アフガニスタン・クナール州内で本流となって現われます。大部分が、冬の雪解け水です。いくつもの支流が集まって本流に注ぎ込む、東部一帯の代表的な河川となっています。我々が活動しているニングラハル州の一部とドラエヌール付近を掠め、Uター

ンをするように、またパキスタンに戻ります。そしてパキスタン内で大小の河川と合流し、大河インダスを形成していきます。水量は一年を通して平均的ではなく、気温が高い夏季のある一定期間のみ膨大に流れ過ぎ去ります。

### 緑と褐色のコントラスト

私が住んでいる北九州には、遠賀川という一級河川が流れています。下流地域では最大幅が五〇〇メートル近くはあります。川幅だけで比較すると、現在私が住んでいるジャララバード市内のクナール河は、その倍以上に大きな川です。流域には多くの住民が暮らしています。

昨年の秋季から冬季にかけて、クナール河の水量が少なくなりました。ジャララバード近郊あたりでは、歩いて渡れる程までに減っていました。市内を外れると、人工的な治水施設がほとんどなく、川から離れれば離れるほど、川の恵みを受けることが難しくなります。もちろん日本のように、高度化された治水設備はありません。飲料水も灌

既用水も、自然環境が造りだした摂理に大きく依存しています。

ニングラハル州都ジャラバードよりグラエヌールまでの道中は、幾つかの村を通り抜け辿り着きます。クナール河の恵みを受けて緑豊かな地域があり、其々の村、其々の集落、其々の家からなる、素朴な営みがあります。子供から大人まで畑仕事や牛の飼育に忙しく、緑豊かな光景が珍しくありません。

しかし、それらと数キロと離れていない、河川から離れた村になると、景色がかなり違ってきます。家が立ち並んではいるけれども、緑豊かな作物が見当たらず、草木もそれほど生えていません。石コロだらけの土地に、慎ましい生活をしている家が数軒。余りにも狭い範囲で、豊かな土地、貧しい土地の境界がくつきりと見てとれます。ひどいところでは数百メートルしか離れていません。緑と茶褐色の強いコントラストが顕著に現れます。

## 不条理の帰結

清潔でない川の水をそのまま飲むと、外国人に限らず現地の人々も、お腹を壊しやすくなるようです。身体に悪影響を与える水は、衛生上良いものではありません。清潔な飲料水を確保することで、病気にかかる患者を減らすことができます、と中村先生は教えてくださいました。川の恵みは自然の恵み、流域に流れる地下水も灌漑用水も、とても貴重な天然資源です。

人為的な不条理の拡大が、暴掠を極め尽くしたあとに、なかが失われ、なかが残り、そしてなかが生まれるのかを、絶えず見極めることが求められると思っています。

多くの警鐘が乱打されるなかでも、まずは自然と共存する道を、平和を摸索していかなければならないと強く感じています。僅かな恵みを得るために、今後も現地と共に活動を続けていきたいと思っています。

(2003・4)

## アフガンの握手をわが身に刻む

水路・灌漑計画担当 清宮伸太郎

今、私はクナール河流域のスランプールという半沙漠地帯の真っ只中で毎日二〇〇人ものアフガニスタン人と朝夕二回握手を交わしている。現在進行中の水路プロジェクトで、約一四キロメートルに及ぶ水の通り道を手掘りで掘り続ける現地レイバー（労働者）に一人ずつ日当を手渡すためである。そんな中、私はこの「手」というものが醸し出す言葉とはまた別のメッセージを、新鮮な驚きと不思議な懐かしさと共に密かに味わっている。「戦争、早魃等々災難はいろいろあったし、これからもあるだろうが、私はこれまで通り、自分が

してきたことを続けていくだけさ。」

幾重にも重なり合った皺が、ちょうど彼の背後に連なる岩山の肌のように長い年月を経て刻み込まれてきた手は、そう語りかけてくるように思えた。その手には、この国が辿ってきた激動の過去とは遠い場所で地に足つけて生きてきたことを象徴するかのような無骨さと抱擁感があった。またこの懐かしさは、幼い頃何度も私を包んでくれた祖父のものを即座に私に思い起こさせた。

また、ある手を握ろうとしたとき、自分の指の何本かが手に余った。見ると彼の人差し指と中指しか握れていなかった。……一体どうやって仕事したんだろう？ という疑問はさておき、これも一つの完全な手の容なのだと思わされるほどの威風堂々とした、儀式とでも呼べるほどの紳士的な握手だった。

またある手を握ろうとすると、触った瞬間すぐに引っ込められた。見ると彼の掌が赤く斑点模様になっている。このような手は他にも数名見られたが、意識的にすぐに逸らしたのは彼だけだった。

またある手を握るとパキポキと小気味良い音がし、こちらの手も逆に鳴らし返そうとしてくる。

ちなみにこちらの人は挨拶時、手に限らず相手の体の骨の音を鳴らすのが非常に上手い。一度慣れると癖になる習慣である。私はまだ鳴らされることしかできない。

そしてこれが私の最も印象に残っている握手なのだが、普通、握手と同時に給与である一〇〇アフガニー紙幣を渡すのだが、ある年長者は受け取りの際、これを足元に落としてしまったのを気にもとめず、しばし私の手を握り続けていた。

断るまでもないが、これらの握手から私が抱いたイメージは全く自分の勝手な想像であり、この先、印象は全く違ったものになるかもしれない。また、日毎に怒涛のように増える彼らにこうして逐一手渡していくのも難しくなると思われる。だが、この場でこんなに沢山の「生の手」に確かに触られたことは生涯私の身体の記憶として残るであろう。

(2003・7)

## アフガン流 臨床心得

PMS医師 仲地省吾

### アフガン人医師の相次ぐ退職

我がPMSの職員は大半がアフガニスタン人です。彼らのほとんどが、この二〇年くらいの間の戦争時代に家族と共にパキスタンに逃れて来た難民です。タリバンが崩壊した後、たくさんのアフガニスタン人の職員が辞職し、アフガニスタンに帰って行きました。戦争で故郷を逃れて来て、いつかは帰りたいと思うのは、十分すぎるほど理解できます。その影響で、今PMS病院は特に医療従事者がどの部門も不足気味で、すこしピンチに陥っています。



灌漑用水路の鍬入れ式

昨年（二〇〇二年）の初めに、私がPMSに赴任した当時、現地医師が二十数名在籍していて、日本でなら小規模の病院に相当するPMSにこんなにはたくさん医師がいることに驚いたくらいです。当時PMSはカーブル市内にも五つのクリニックを持ち、アフガン東部の三つのクリニック、パキスタンの二つのクリニックを合わせると何とPMS病院以外に一〇ヶ所のクリニックを運営していたので、クリニックに派遣する医師の数を考えると、二〇人以上の医師が在籍していても不思議ではなかったのです。しかし、私が赴任して以来、十数人の医師が辞職しアフガニスタンに帰って行きました。新たに採用したりもしていますが、日によっては、ほんの三人程の医師が外来に座っていることも希ではなくなっています。

中村医師の方針の一つ「誰も行かないところに行く」のもと、世界のNGOが殺到しているカーブルで、PMSのクリニックを閉鎖撤退したこともあって、PMSの負担が少なくなり、数少ない医師数でも何とかやっているとというのが現状で

す。我々の活動方針とは相反して、ペシャワールにあったアフガン難民のための外国のNGO医療機関もカーブールに次々と移動しているのです、逆にペシャワールに残っている難民にとっては困った状況になっていると思います。PMS以外に二つあった日系の医療機関もカーブールに移動しました。その影響か、明らかに外来に来る患者数は増加しています（後で説明しますが、当院をわざわざ訪れても受診できるとは限りません）。

### 診察数制限の苦悩

PMS病院では一日約三〇〇人の外来患者さんを診察します（外来診療は午前中だけ）。曜日によって減ることもありますが、これ以上増えることはありません。たとえ五〇〇人、六〇〇人の患者さんが門に押し寄せても、診察できるのは、大変酷のようですが、三〇〇人くらいなのです。普通日本では（もちろんパキスタンでも）病院は患者さんを診ることによって収益をあげることができます。患者さんが増えることはいいことで

あって、利益が出るし、病院も発展拡張させられます。ところが、PMSのようなNGOの医療機関だと、収入は日本の一般の皆様の寄付金だけで、逆に患者さんをたくさん診ることは支出が増えることになります。一年間の予算は決まっています、診れる外来患者さんの数も自ずから決まっています。無制限に患者さんを診ていたら、あつという間にお金は無くなっていくでしょう。

ペシャワールにある他のNGOの病院も同様に患者数を制限するシステムを取っているようです。もちろんこれは私たちのPMS以外にもたくさん医療機関が存在する大都会のペシャワールだからできるのであって、遠隔地域にある私たちのクリニックではすべての来院患者さんを診察しています。

患者さんの受付をしている病院の門では、一定の数に達すると、診察券の配布を停止します。後は重症（救急）患者さんだけを受け付けるということになっています。しかし、誰が救急であるのか、ないのか判断するのは大変難しいことはずぐ



灌漑用水路の工事現場。一日600名近い労働者が汗を流す

想像できません。しかも受付をする職員は医療従事者ではありません。

PMS病院はちよつと不便なところにあります。以前の会報でも書いたように多くの患者さんはバスやタンガ（馬車）を乗り継いで片道一〜三時間くらいかけて私たちの病院にやって来ます。必死の思いでやって来たのに、診察を受けられずに帰っていく患者さんのことを思うと胸が痛みます。診察券をもらえなかった一部の患者さんは、門をすり抜けて診察室に侵入し、私の様な日本人医師を見つけると必死に訴えてきます。「こんなにひどい症状があつて、こんなに遠いところからやって来ているのに、なぜ診てくれないのか」と。しかし、私にしてもこの人に診察券を与えて良いかどうか判断するのは大変難しいのです。門の外には診察を拒否されて素直に帰っていく人や、まだ待っている患者さんが大勢いるのです。その人達を全員観察して重症度のひどい人たちから順番に診察券を与えれば、問題ないのかもしれませんが、そんなことをするのは不可能ですし、門をすり抜

けて侵入できた人だけに診察券を与えるのも公平さを欠きます。こういうことは日本では全く経験のなかったことです。NGOとして医療をやっている難しさを改めて感じさせられました。

### 直情で潔いパシウトウン人患者

患者さんが救急であるかどうか判断するのは難しいと書きましたが、実はPMSの外来で診る患者さんは全員急性疾患です。「特別外来」で診るハンセン病などの患者さんは別にして、いわゆる慢性疾患で定期通院しているという患者さんはいません。

PMSの外来で投薬できる薬は、四十数種類に限定されており、これには高血圧や糖尿病などの慢性疾患の薬は含まれておらず、すべて急性疾患に対応するものだけです。もちろん診察の結果慢性疾患を合併していることはしばしばです。しかし、当院でその薬は処方できないので、患者さんにはバザールの薬局で買ってもらいます。結局、単に診察を受けるだけのために当院にわざわざ定

期通院する人はいなくなりそうです。またもし慢性疾患の患者さんにも薬を配布すれば、あつという間に外来患者数はとんでもない数になり収拾がつかなくなり予算もないので、不可能です。日本の一般病院で外来患者三〇〇人といっても普通その内二〇〇人以上は定期通院の落ち着いた患者さんです。PMSの外来の激しさが想像できると思います。

医師の仕事はやはり患者さんと会話して初めて成り立つものです。私は赴任した当初は通訳を置いて外来をしていました。通訳といっても現地語のパシウトウ語を日本語ではなく英語に通訳してくれるだけですから、私にとってはかなりまだるっこく感じることにあります。医師としての喜びもあまり感じられませんでした。

もちろん一年以上経っても私にとってはパシウトウ語を理解するのは大変困難ですが、医療関係の用語だけはなんとか覚えて、数ヶ月前から通訳無しで自力で外来診療を試みています。当初は私の前に座った患者さんも、全く意思の疎通が取

れないとみると、すぐに他の現地医師の席にさつと移っていたのに、最近ではお互いの会話は不充分でもほとんどどの患者さんは最後まで私の前に留まっています。時には今診ている患者さんの後ろで次の患者さんが列を作って待っていることがあります。私の診察は現地医師に比べるとはるかに時間がかかるし、私も気になるので、看護師に他のドクターの席に行くように言ってくれと頼んでも動こうとせず、どうも私に診てもらいたいと言っているというのです。ちょっと恥ずかしいような嬉しいうな気持ちになります。また次に待っている患者さんが、私のへんてこりんなパシウトウ語を理解して、今診ている患者さんに同じパシウトウ語で通訳(?)してくれることもしばしばです。

患者さんの大部分は子供を連れた女性達です。外に出る機会があまりないイスラム社会の女性達なのでおとなしい人たちであろうと、一般には想像するでしょうけど、いやいや、とても激しいです。外来での訴えの激しさは日本人の比ではあり

ません。貧乏だから何とか助けてくれと哀願されたり、こちらの治療方針に納得しなくて、いろいろわめいても私が「この薬を飲みなさい。これで終わり」と言うと、あんなに激しく言っていたのに、あっさりと何事もなかったかのように、すぐに引き下がります。実にさわやかです。ああ、日本と違うなと思ってしまうところですが。でも、このパシウトウン人達の「激しさ、あっさり」スタイルがだんだん心地良くなってきているこの頃です。

(2003・10)

## わが「現実」は アフガンの農場にあり

農業計画担当 橋本康範

### 夢か悪夢か

私は先月「夢の国」日本での休暇を終え現地へ戻ってきた。日本は確かに夢の国だった。スイッチ一つで快適な空間が作り出せる機械、二四時間まぶしく光りながらありとあらゆるものを売っている店、身体を痛めることなくスムーズに車が走れる道路、変な虫や病気を恐れることなく思い切り食べる事が出来る食べ物、如何様にも身体に心地よい暮らしを作り出せる国なのだ。

日本に着いてすぐ、私はペシャワール会の報告

会に出席した。すると今度はアフガニスタンの出来事が夢の中の出来事のような気がしてならなくなったのだ。つい何十時間か前の、実際の出来事を話していたのだが……。アフガニスタンの風景や状況が、その時自分が立っていた情景とはあまりにもかけ離れすぎていたのだ。どっちが夢か現実かはつきりしないまま、私は驚くほど快適で楽しい日本を満喫した。しかし、日本での一ヶ月の間、あらゆることに違和感を覚えながら過ごしたように思う。そして、「夢の国」に一ヶ月もいるとなんだか息切れがしてくるのだ。騙だまされているような気がしてならないのである。表面上はとも住みやすく、過ごしやすく大げさに飾っているが、その実何だか悪夢が蔓延まんえんしているような気がしてならないのである。三週間を過ぎる頃には、すごくアフガンが恋しくなった。

### 「ミスター・ハシモト、問題ないよ。」

案の定こっちに戻ると何の違和感もなくすぐに自分の身体と心はアフガニスタンに溶け込んだ。



豊作の試験農場を訪れたPMS一行（右から4人目が橋本）

改めて今の私の『現実』はここにあるのだと強く感じた。

早速、私はパイロットファーム（試験農場）のあるグラエヌールのカライシヤヒ、ブディアライの両村へと向かった。日本に帰国する前に私のパートナーであるワリー氏と今後一ヶ月の予定や各作物に対する作業についてミーティングを持った。そして何より、この一年ほぼ毎日顔を合わせ一緒に仕事をしてきたパートナーだから、何か問題が起きたとしても彼は私の考えを推察しながらうまく自分の考えとミックスして対処してくれると信じていた。しかし、どきどきした。そこには、カライシヤヒ村のパイロットファームヘソルゴ、アルファルフア、大豆三種類、トウモロコシ、お茶、ブディアライ村のパイロットファームヘソルゴ、アルファルフア、トウモロコシ二種類、甘藷、ブドウが元気に育っていたり、しっかりと実って収穫されたりしていた。確かにいくつかの問題も起きてはいたが……。例えばお茶の原因不明の枯死が続いていたこと。それに対しては枯

死した苗を土から起こし、根や土を調べ、それでも原因ははっきりしなかったのだが、灌水を調節したり、日囲いをつけたりしていた。スイートコーンの発芽不良については昨年パイロットファームで収穫できた適応性の高かった品種を再度播種していた。

全ての問題に対して、適当に時間を待ち様子を見よう、というのではなく、何とかして改善しようとして一所懸命やっていた。しかもその対処の仕方がおそらく私がいたとしても同じようなことを考えただろう、と思われることばかりだったので、それが素直にうれしかった。そして彼らは笑って言った。

「ミスターハシモトがいなくてアンハッピーだったが仕事に関しては全く問題ないよ」と。

『夢の国』日本から再び帰ってきた私を農業計画のスタッフを始め、多くの現地スタッフは温かく迎えてくれた。中には村人までも。みんなと抱き合い、その後決まって彼らはこう聞くのだ、父さん、母さん、兄弟、友達、みんな元気だった

か？ っ。時には冗談で子ども達は元気かなんて聞いてくる者もいた。彼らのこんな温かさが何よりも私のエネルギーになるのだ。そして何よりもうれしいものだ。アフガニスタンは依然として混乱がつづいている。しかし、いったんこっちの人に触れ、文化に触れ実際に生活をしてみるとすごく懐かしさを覚える。人が人らしく生きられる国、それがアフガニスタンなのだ。

(2003・10)

## 蛇籠は完成、次は聖牛

水路・灌漑計画担当 鈴木 学

### 士気上がる水路チーム

現在、全長一四キロある第一期水路計画工程の



蛇籠の制作工房。ワイヤーに石を詰めて護岸や制水に用いる

うち約半分の前半エリアで作業を行っており、約三ヶ月半で二・五キロの掘削がほぼ完了している。ただ、これから取水口付近や、最大掘削約八メートルの岩山、大量の埋め立てが必要な区間、水道橋、岩盤を破壊しながら水路を造っていく場所など、難所が待ち受けており、いよいよ水位が下がる冬場に向けて水路事業は本番を迎えようとしている。

客観的に見て我々PMSのエンジニアの質は非常に高く、夏の焦げるような暑さ、ある時期決まって毎日やってきた砂嵐とその後の豪雨も乗り越え、毎朝日の出が遅くなるのを感じられる今日この頃、カナル（水路）チームの士気はさらに充実している。

水路事業の専属日本人スタッフは二名。日曜から木曜の朝五時から夜遅くまで、車での移動と食事の時間以外はエンジニアとともにカナルの仕事に携わる。清宮さんの主な仕事は日々のレイバ（作業員。約五五〇名/日）のサラリーを確実に払うこととそのお金の管理、および水路の進行

状況を把握すること、自分は水路の取水口部分に大量に必要な蛇籠じやぶこと聖牛せいぎゅうの作成を担当している。蛇籠は、亜鉛メッキしてあるワイヤーを編んで、組み立て、ワイヤーで編まれた丈夫な箱を作り、その中に石を詰める。これが容易に扱える非常に強固な構造物になる。これを強い水の流れが直接ぶつかる箇所の護岸や、水位を上げる目的で川の中に造る堰せきの材料として使う。聖牛は正三角形の鉄筋コンクリート柱（一辺の長さ約一・五メートル、コンクリート柱の断面約一〇〇平方センチ、重さ約一〇〇キログラム。これを並べて水路の護岸にも用いる）を三つ組み合わせ安定した正三角錐構造すいにし、蛇籠と組み合わせて取水口付近の防護に用いる。こちらは、強い水流の制御や、流れてくる大石が直接、蛇籠堰に当たるのを防ぐためのテトラポットのような役目もある。

蛇籠も聖牛も昔から日本で使われてきたもので、中村医師が提案して作成が開始された。蛇籠はガビヤンという名前でアフガニスタンでも多く見かける（使い方は日本と多少異なる場合もある）。

聖牛は、日本では昔から木を使って造られてきたが、こちらの木はとても高いため鉄筋コンクリートの聖牛にし、コンクリートの型作りから始まり全てオリジナルである。

### 作業員と家族ぐるみの交流

近頃は、蛇籠プロジェクトが目標（蛇籠三千個）の半分以上のストックを二ヶ月半で達成したことから（作業員数約四五人／日、作業日週六日）、こちらはサイト・エンジニア（現場監督）に任せ、日々のチェックと材料の補充にのみ気を配っており、毎日聖牛プロジェクトのレイバー（作業員）と一緒に鉄筋コンクリートの聖牛作り（作業員）と一緒（作業員）に励んでいる。全員（八名）が宿舎のすぐ前の村か、歩いて一〇分くらいの場所から来ており、たいてい午後は自分の畑を耕している。八名のレイバーのうち兄弟が二組、ほぼ全員がなんらかの親戚関係にある。皆、非常に人間味があり、毎日彼らと共に作業するのは本当に楽しい。彼らと仕事をしていると、こちらの人は子供がそのまま大人



PMS オリジナルの聖牛が完成した

になったような人が多いと感じる。良く喋り、歌う。こちらが真剣に仕事をしていると彼らも真剣に仕事をする。文字が書けない（読めない）者も多いし、全員英語など話せないが、かたことのパシトゥー語と実際にやってみせることで仕事に支障はほとんどない。最近は一〇時半の休憩になると強引に日陰に引っ張って行かれ、チャイが入られ、自家製の揚げたナン（アフガンのパン）を皆で食べる。一〇時を過ぎると小さい子が兄弟でぞろぞろ前の村から出てくる。母親にチャイやナンを持たされて男の子も女の子も裸足でとことこやってくる。そして、コンクリートを作っている場所に来て、どこで食べるのか父親たちに聞く。全員マクタブ（学校）に行く前の小さい子ばかりである。暑い日の午後にはクナル河で洗濯もかねて泳ぐこともある。そう豊かでないにしろここではひとも自然も魅力にあふれている。

自分の関わっている蛇籠・聖牛作成作業だけを見ても、多くの日本、パキスタン、アフガニスタンの人々の協力で支えられていることを日々感じ

ている。蛇籠レイバー用の丈夫な軍手（一ヶ月に約一〇〇組必要）は日本の事務局から、大量に必要な蛇籠用ワイヤーはペシヤワールで購入してもらっているし、ワイヤーを切るカッターは長嶋さんが日本からたくさん持ってきてくれたものだ。聖牛作成に必要なセメント、鉄筋の購入・輸送はジャララバード、ドラエヌール両事務所の協力が必須だし、砂利、砂の採取（クナル河の河原から）にはダンブやエクスカベーター（掘削機）のアレンジをエンジニア達との協力のもと行う必要がある。沢山の人たちの支えのもと、今日も一日無事に作業を終えられたなと、サイト（作業現場）からドラエヌール事務所に戻る車の中で赤く染まった西の空を見ながら思う。

（2003・10）

## 今こそ我々の出番

水路・農業計画担当 橋本康範

この一ヶ間、アフガニスタンはラマダン（断食月）であった。日の出ている間は一切の物を口に出来ない。昼食はもちろん水やお茶、タバコや歯を磨くことすら出来ないのだ。

そして私もこのラマダンに挑戦した。まずは早朝起きるのがつらかった、なので、起きそびれて朝食抜きの一四時間何も食べないで過ごさねばならない、という羽目にも何度かあった。しかし、なによりもつらかったのは水やお茶が飲めなかったことである。だいぶ寒くなってきたとはいえ日中少し動けば汗は出る。また、休日何も口にしない

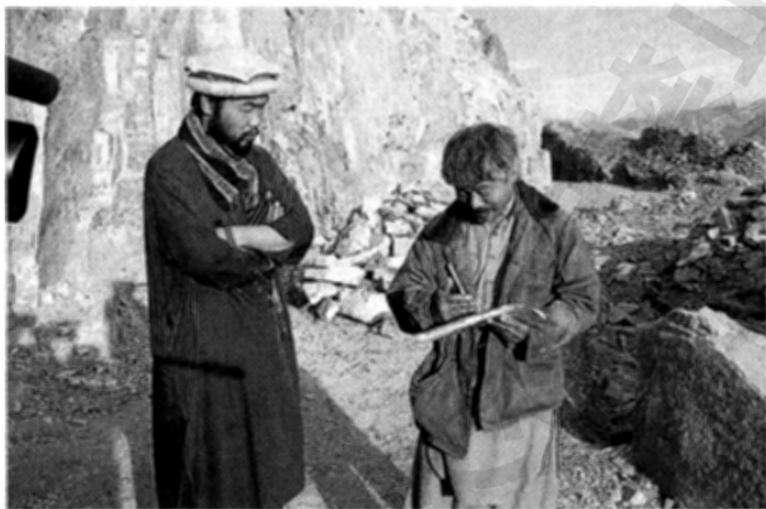
いで過ごす一日も意外ときつかった。夕方、アザーン（モスクからスピーカーを通して礼拝の時を人々に報せる。ラマダン期間は夕方のアザーンが食べ物を口にしてよい合図となる）が聞こえてくる三〇分ほど前から人々は準備された夕食を前に今か今かとナン（現地のパン）を手で丸めながら待ちわびる。そしてアザーン後の食にありつくその姿勢はどんな大食い大会に出てくる選手よりも凄まじいものがあつた。私もそんな一人になっていた。

そんなラマダンの真つ只中、高橋さん（農業指導員）がアフガニスタンにいらつしやつた。高橋さんも「ミニ・ラマダン」を体験された。昼食やお茶を抜き、さすがに大好きなタバコは吸っていらつしやつたが、それでも、現地の人たちに申し訳ないから、と言つてだいぶ我慢していらつしやつた。さらに過酷な条件の中、お茶八五〇本の植え付け、ブドウの移植、アルファルフア、ソルゴーなどの現地適応作物の調査、発芽・発育不良であつたトウモロコシの調査、用水路への植樹

品種の調査、そしてサイレージ（発酵飼料）作り、を行った。一年を通して農業に関して今が最も重要な時期、また、将来のPMSの農業計画を左右する重要なポイントとなる作業ばかりだったので、この大変な時期にもかかわらず高橋さんが来てくださったことは非常に心強かつた。

井戸の方は用水路のほうへ多くの人員を配置しているため、一部の地域での活動は縮小してきているものの（アチン郡ではいよいよ最後の井戸の作業に入っている）、日々七〇本ほどの井戸の掘削を続けている。また、現在手がけている四つの灌漑用井戸からも水が出始め何とか小麦シーズンに間に合つた。現在はタービンポンプの設置に追われている（これを早く済ませてしまわないと各畑で小麦やクローバーの播種をしてしまい、乾いた畑を道路代わりに使用している現在、物品の輸送が困難になる）。

用水路のほうも来年二月まで「用水路D地区までの通水」を目標に全力を挙げている。水深が最低となるこの時期、取水口の建設、そのための川



用水路建設現場で打ち合わせ中の中村（右）と橋本

の堰き止め、また、B・C地区に立ちはだかる巨石の爆破、各地区での蛇籠の設置準備と大詰めを迎え、早朝五時から夕方まで飲まず食わずのなか、各スタッフが必死に任務を全うした。今はラマダンも終わりイード（ラマダン明けの祭礼、ご馳走や晴れ着を用意して親戚友人の家を訪問する、日本という正月の雰囲気がある）を迎えている。

政府、国連、他のNGOが大抵五日から一週間ほどイード休みを設け、国連、他のNGOスタッフにいたってはアフガニスタンを出てペシャワールなどのパキスタンで休暇を楽しむものがほとんどだ。また、現在のアフガニスタンの情勢から早々と活動規模を縮小したり撤退したりしている機関中にもある。我々はジャララバードに残り、米軍のヘリが頭上を飛ぶ中、庭でバーベキューや鍋をしたり、生きた鶏を買ってきて新鮮で豪快な一羽丸ごと蒸しや、から揚げ、グラタン、はたまた天婦羅、アイスなど、アフガンで手に入る材料、道具を最大限に工夫、利用して手料理を作ったり、現地スタッフの家を訪問したりと我々なりのイー

ド休暇（料理）を楽しんだ。そして、いつどうなるか分からない不安定な情勢を見据えて我々はイード休みを三日に短縮し、明日からまた再び「戦場」へ向かう。今こそ我々の出番である。

（2003・12）

## 灌漑用水路建設の最前線から

水路・灌漑計画担当 鈴木 学

### 用水路建設、米ヘリ下でも黙々と

米軍のヘリが頭上を飛び交うクナル川で、日々灌漑用水路建設は着実に進められている。こんなふうによくとなんだか大げさに聞こえてしまいが、不安な心境でびくびく作業をしているように受け取られかねないが、実際にはスタッフ（日本

人もアフガン人も）にそんなことを気にしている余裕は全くない、というのが現実である。この冬、最も河川水位が下がる状態で通水を行うため、重機（エクスカベータⅡ掘削機四台、ローダー一台、ダンプトラック七台）と、作業員六〇〇人による作業が、淡々と行われる。日本人スタッフに求められる仕事も、アフガン人スタッフへの完全なサポートに徹していた初期に比べ、積極的に牽引（けん）していくことが必要な場面も増えてきたように感じる。そうでなくても遅れることが当たり前。こちらの事業において、クナル川の増水開始時期は待つてくれないため時間勝負になってきているからだ。

実際に用水路C地区の発破作業中に米軍のヘリに発砲されたときも、中村医師を中心に近くのA地区の護岸工事について皆で真剣に検討している最中で、自分は低空で旋回するヘリの音で中村医師の声が聞き取れずいらいらした記憶がある。現場はそういった状況であり、攻撃用ヘリの旋回する下を米軍車輛の大行列が延々続く日も、輸送



日本人ワーカーの宿舎はまるで合宿所

用ヘリとその後ろに必ずついてくる攻撃用ヘリが忙しそうに飛び交う普段の日も、水路の工事は朝六時半から淡々と進められる（この一ヶ月間はラマダン期間だったため日本・アフガン両スタッフ、作業員全員が休憩・飲食の時間を入れずに七時間を一気に働いた）。

### 蛇籠作成はイード前に完了

現在、取水口からD地区の溜め池（約二ヘクタール）までおよそ三キロメートルの区間で集中工事を展開中だ。同時に、取水口工事のためにはクナル川を一時的に堰き止め、川の水を夏の増水時期にできる支流に流す工が必要となる。できるだけ河川水面を下げた状態をつくって、取水口（水門）工事をより容易に安全に行いたいためだ。したがって今、取水口の四〇〇メートル上流地点には、川幅一〇〇メートル以上あるクナル川の真ん中まで堰が突き出ている。イード明けに工事を再開すれば一週間で築堤工事を完了できる状態である。この進行中の築堤工事と、工事に

よって川の水が来る対岸地区の護岸・制水工事は、すでに蛇籠（じまご）（＝布団籠。九〇個）も使用してイード前に大急ぎで完了させた。

### 掘削機の運搬も一日がかり

イード直前の一週間でこの対岸工事を早急に終わらせるためには、どうしてもエクスカベータを一台対岸に送る必要があった。一日がかりでエクスカベータを対岸に送ったとき（クナル川には橋がほとんどないため、対岸を工事するためには一度橋のあるジャララバード近くまでエクスカベータで戻ってから、クナル川の左岸を再び悪路を十数キロメートル登ってこなければならぬ。おまけに対岸の道が崩れていたため、数キロ手前で河原に下り、エクスカベータで道をつくりながら現場までたどり着かねばならなかった）には、自分の読みの甘さもあり、スタツフに大変苦勞をかけた。

休日の金曜にもかかわらず下見に一日つきあっていただけ、土曜の当日には八時間かけて途中か

ら道のない河原をきっちり誘導していただいた清宮さん。現場での仕事を終えた後（午後三時）、途中でのエクスカベータ故障を考えて（見事にはずれた）車で対岸に向かう自分を冷静にサポートし、的確な指示でジャララバードに到着する八時半まで一緒にいて下さった橋本さん。結果的にはエクスカベータも送ることができ、皆無事であったため言うことなしだ。

### 自分一人では何もできない

しかし、冷静に場所と情勢を考えると、自分ひとりでは何一つできないことも事実である。この日はいつものことながら特別に、頼もしい先輩二人と仕事ができる現在の自分の境遇に感謝した。また、普段の忙しさにラマダン期間中という厳しい条件も重なったこの一ヶ月間、エクスカベータのオペレータとして助人に駆けつけてくれた石橋さんには、清宮さんも自分もずいぶん勇気づけられた。こうした信頼できる日本人スタツフチームの強固な連携なしには、水路事業という困難なプ

プロジェクトを進めていくこと自体まず不可能である。時には冗談で疲れた心身をリラックスし、仕事の際はきっちり自分の役割を果たしていく、灌漑用水路の現場はそんなところだ。

(2003・12)

## 日本人の願いを伝えたい

ジャララバード事務所会計 大越 猛

### 「縁の下」で雑務全般を担当

会員の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。私は勤務開始以来七ヶ月、ジャララバード事務所のオフィスセクションに配属され仕事をしています。

水源確保、用水路建設、農業計画はいまや正規スタッフ約一五〇人、日雇い労働者約八〇〇人を

抱える大所帯となっていますが、オフィスセクションはこれらの人達が現場で働くのを裏方で支える縁の下の力持ち的存在です。具体的には、機械・車輛・道具などの一切の必要資機材をアレンジしたり、各役所への許可申請・折衝などを行ったり、スタッフの採用・昇給など人事を管理したりと、現場で働くスタッフが最大の成果をあげられるように雑務全般をこなしているといえます。私もそうしたオフィスの性格を受けて、その時々必要とされる様々な仕事に携わっています。

これらの仕事の多くはそれ自体日本人でなくともできるのですが、最近日本人である自分が彼らとともに仕事をするこの意義があるのだと実感することができるようになりうれしく思っています。

それはPMSを物心両面から支えてくださっている会員の方々の想いを少しでも代弁することです。

ときには「説教」も……

こんなことがありました。活動の様子を記録に収め、日本側へ伝えることも私の仕事の一つですが、ある日水路の掘削の様子を映像に収めるために、工事現場を訪れたところ、五、六人のスタッフが集まっていました。私が来訪の目的を伝えたところ、彼らは笑い出し「何だ、撮影にきたのか。そんなのは遊びに来たようなもんだな。俺達は大変な仕事をしているのに、君は呑気なもんだなあ」というのです。私は、一瞬耳を疑いましたが、気をとり直して言いました。「君達は自分達が全て独力で仕事をしていると思ひこんでいるようだけれど、これらの工事費用や君達の給料を負担しているのが誰なのか考えたことがあるのかい。これらのお金は全て、日本のドナー（寄付者）が苦勞して自分で稼いだお金から善意で削って出してくれたものなんだ。そうした人々の厚意に応え、工事の進捗状況を報告する仕事为本当に遊びだと思ukai」。彼らは、ハツとした様子を見せ、すぐに謝ってくれ、それからとはとても協力

的になってくれました。

また、こんなこともありました。ペシヤワールの病院と連絡を取り、必要なアレンジをするのも私の仕事です。必要に応じて現地スタッフの人に話をしてもらおうのですが、通話料が非常に高く、要領良く話さなくてはなりません。そのことをある現地スタッフに頼むと、彼は「大丈夫、高くても僕や君のポケットから出ているわけじゃないから気にすることなんか無いよ」と笑い飛ばす始末。そんなときにも、恥ずかしながら私の説教が始まってしまいます。

### 会員の想いを伝えることの大切さ

もちろん、彼らに悪気があろうはずがありませんが、こんなやりとりがときどき交わされます。日本へ行ったことのない彼らの中には、PMSの運営資金が、アフガンの困った人たちの役に立ちたいという、多くのドナーの善意の結晶であることに思いが至らず、どこからか無尽蔵に湧き出て来るかのように思い、それがときにコスト意識の

低下や、仕事ぶりに影響することもあるようです。そんなときには私も日本人ワーカーの一人として、言うべきことははっきり言うように心がけています。

現地のスタッフと共に仕事をし、ドナーの皆さんの想いを伝えていくことで、提供してくださったお金が実際に少しでも多くの成果となり、アファガンの困った人々に恵みとして届くようにすることも大切な仕事だと考える今日この頃です。

(2003・12)